



ポイヤウンペの戦い ①

「金成マツ版 虎杖丸」から 文：瀧口夕美 絵：小笠原小夜

金のラッコ 争い再び

私の名はポイヤウンペ。シヌタツカという村で、育ての兄と姉と暮らしている。家は大きくて、たくさんの宝物があり、光にみちている。私は美しく、元気な少年に成長した。兄と姉が大事に育ててくれたおかげだ。あるとき、こんなうわさが聞こえてきた。

「石狩村の入り江に、金色のラッコがいる。つかまえた者は、村長の妹と結婚でき、村長の宝の半分がもらえるそうだ」。ラッコをつかまえようと、石狩村には別の村からも男たちが大勢集まっているらしい。

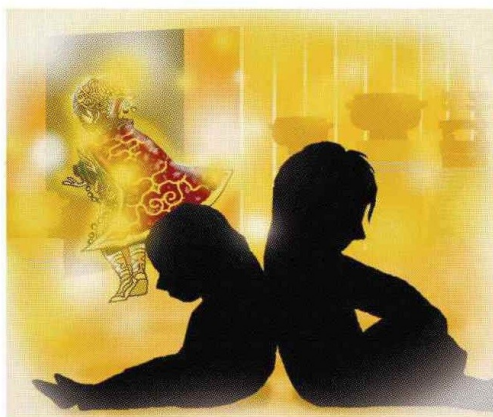
私はなぜか、そのうわさがとても気になった。兄は心配そうに、しばらくいろいろの灰をととのえていたが、やがて美しい声をひびかせて、こう言った。

「わが弟、モシリ(この世)を守るカムイ(なみはずれてすぐれている人)よ。金のラッコのうわさをご存じでしょう。あなた以外のだれを試そうとして、こんなことが起こったのでしょうか。けれど、あなたがそれに関わってしまえば、昔起こったいさかいが、また巻き起こってしまう。そ

んなうわさなど、気にとめないでください」

兄の言葉を私は聞き流した。すると、兄と姉は、たきぎを部屋にたくさん運びこみ、夜も昼もいろいろの火を絶やさず、ずっと私のそばにいる。どうやら2人は、私がラッコをとりに行かないように見張っているのだ。けれど、6日もたつと、兄も姉も、大いびきをかき始めた。私は夜中にそっと起き上がって家をぬけだし、空にまいた。

上空から見ると、石狩村には、はじめからじまで、ラッコとりの男たちの仮住まいの小屋が、ずらりと並んでいる。海岸には、小さな船もたくさん引き上げられている。



港の大きな岩のすぐ横に、マツケマツケ(ぴかぴか)と光が見えた。それが金のラッコだった。私は下くちびるをかみしめ、ねらいを定めてラッコをつかまえようとした。ラッコは氷のように私の手の間をすべりぬけていく。

にがすものか海底にもぐると、私にむかって渦潮が起こった。金のラッコが海底をすばやく泳ぐ。私は、あっちこっちへ回りこんだが、なかなかふれることができない。しかし、精いっぱい力をしぼり出したとき、ついに手ごたえを感じた。ぐったりとした金のラッコが手の中にいた。

家にもどって、祭壇にラッコを置くと、私はねたふりをした。姉が目覚まして窓を開けると、外の光を浴びて金のラッコの神々しい光が、家じゅうにぱっと広がった。兄も目を覚まし、おどろきとともに「こういうことがまた起こるとは…」とつぶやいた。

兄が心配していたとおり、このできごとは、私の父の時代に長く続いていた戦いが、再び始まったことを意味していた。

